

第5回M&Aフォーラム賞「RECOF賞」 選考結果のご報告

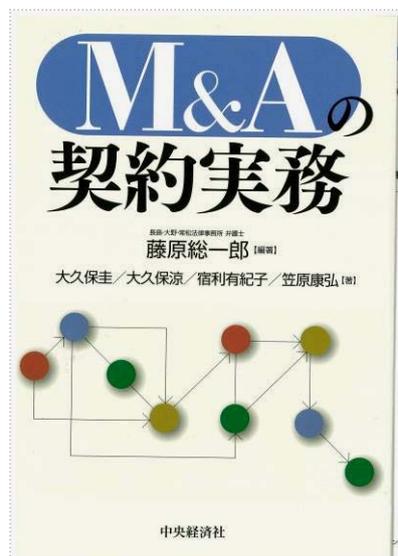
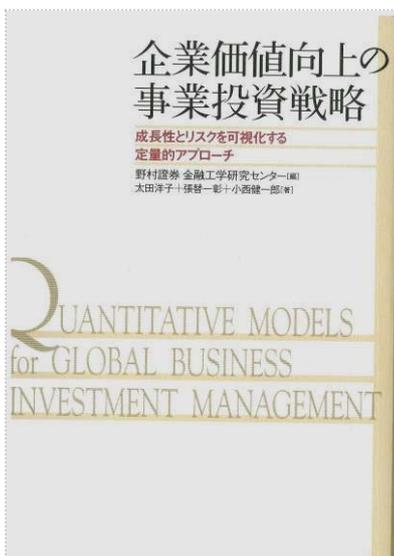
2011年10月4日
M&Aフォーラム 事務局

(敬称略)

- ✉ M&Aフォーラム賞正賞 『RECOF賞』 1篇 (副賞 50万円)
- ☞ 『企業価値向上の事業投資戦略～成長性とリスクを可視化する定量的アプローチ～』
(ダイヤモンド社)
- 著者：太田 洋子 (野村證券㈱) 金融工学研究センター クオンツ・ソリューション・リサーチ部 部長
張替 一彰 (野村證券㈱) 金融工学研究センター クオンツ・ソリューション・リサーチ部
シニアクオンツアナリスト)
小西 健一郎 (野村證券㈱) 金融工学研究センター クオンツ・ソリューション・リサーチ部
シニアクオンツアナリスト)

- ✉ M&Aフォーラム賞奨励賞 『RECOF奨励賞』 1篇 (副賞 10万円)
- ☞ 『M&Aの契約実務』 (中央経済社)
- 著者：藤原 総一郎 (長島・大野・常松法律事務所 パートナー 弁護士)
大久保 圭 (長島・大野・常松法律事務所 パートナー 弁護士)
大久保 涼 (長島・大野・常松法律事務所 パートナー 弁護士)
宿利 有紀子 (長島・大野・常松法律事務所 アソシエイト 弁護士)
笠原 康弘 (長島・大野・常松法律事務所 アソシエイト 弁護士)

- ✉ M&Aフォーラム賞選考委員会特別賞 『RECOF特別賞』 1篇 (副賞 10万円)
- ☞ 『バイアウト・ファンドの機能に関する分析』
(筑波大学大学院ビジネス科学研究科 博士学位論文)
- 著者：野瀬 義明 (筑波大学大学院ビジネス科学研究科 博士課程修了/
大和企業投資㈱) 投資本部 事業投資課 次長)





【ご挨拶】

落合 誠一 (M&Aフォーラム 会長
中央大学法科大学院 教授 東京大学 名誉教授)

わが国経済は、2008年のリーマンショックに続き、2011年の東日本大震災により大きな影響を受けております。企業を挙げての懸命の努力により、震災後の主要製造業の生産はほぼ回復しつつありますが、サプライチェーンの寸断や、歴史的な円高を受けて競争環境は一変し、企業の海外移転は、大企業はもとより、中堅、中小企業も含めて大きな動きとなっております。

このような状況を反映して、わが国のM&Aは、国内案件(In-In)は前年を大きく割り込む動きになっておりますが、海外への進出案件(In-Out)は前年を大幅に上回り、このまま行けばこの10年での最高の数字となる見通しにあります。このように、今やM&Aは企業の経営戦略として名実ともに定着してきおり、M&Aは企業の事業展開に不可欠なものとなってきたといえます。

私どものM&Aフォーラムは、内閣府経済社会総合研究所のM&A研究会の報告においてM&Aに関する民間ベースのフォーラムの創設が提唱され、わが国のM&Aの健全な発展と普及を促進する活動を行う場として設立されました。メンバーには、M&A関係分野の有識者、実務専門家、企業関係者が参加されております。本フォーラムはわが国のM&Aの在り方について提言を行うと同時に、主として企業人を対象に「M&A人材育成塾」を実施しM&A人材の育成に資する活動を実践しております。また、「M&Aフォーラム賞」はわが国におけるM&Aの普及啓発を図り、あわせてM&Aに精通した人材を育成することを目的として、レコフさんの全面的なご支援を得て実施しております。このM&Aフォーラム賞は今回で5回目ですが、年々質の高い作品が応募されてきており、わが国にM&Aが着実に定着し議論が深まってきていることが感じられます。今回から、岩田日本経済研究センター理事長が審査委員長に就任されましたが、講評でも述べられている通り応募作品を高く評価されております。

今回、このような多くの優秀な応募作品の中から見事に正賞、奨励賞、特別賞に選ばれた受賞者の皆様には心からお祝いを申し上げます。

M&Aフォーラムも設立して5年余りが経過しました。徐々にではありますが活動の範囲も拡大しており、実績も積み上げられております。皆様には、本フォーラムの趣旨をご理解賜り今後ともご支援の程お願い致します。



【講評】

岩田 一政 (公益社団法人日本経済研究センター 代表理事・理事長)

第5回目の「M&Aフォーラム賞」には、応募作品が14作品提出されました。応募された上位の作品は、審査委員がいずれも高い評価を与える秀作でした。日本のM&Aの市場が大きく発展しているばかりでなく、M&A研究も、大きく前進していることを心強く思います。

上位の作品のなかでも、太田洋子、張替一彰、小西健一郎共著『企業価値向上の事業投資戦略 ～成長性とリスクを可視化する定量的アプローチ～』は、豊富な内外のデータを駆使して、事業戦略のあり方を「ヴァリュー・ドライバー」と「リスク・ドライバー」と

いう2つのコンセプトで鋭い切込みを入れています。サブタイトル通り事業戦略の「成長性とリスク」を可視化することに成功しています。

特に、ケーススタディは秀逸です。「ヴァリュー」と「リスク」、また、「M&Aの国際展開」の視点からの同業他社との比較は巧みであり、企業家でない読者にも胸が躍る思いがします。また、国際資本コストの導出は、興味深いものがあり、本書の隠れた共著者とも言えるコーブランドサンディエゴ大学特別教授によるクオンツモデルの特色がよく出ています。本書は、M&Aのみを対象として扱ったものではありませんが、企業の全体の事業展開のなかでM&Aがどのような役割を演じるのか、その全体像を提示していると言えます。審査委員の満場一致でM&Aフォーラム賞正賞を決定しました。

また、M&Aフォーラム賞奨励賞として、契約実務に携わる人にとって必携の書とも言うべき藤原総一郎、大久保圭、大久保涼、宿利有紀子、笠原康弘共著『M&Aの契約実務』を決定しました。本書は、日本のM&A取引で締結される典型的な契約の各条項について、その法的性質に立ち返って検討している点に特色があります。特に、「表明保証」については、実務書のレベルを超えた解説が行われています。

さらに、社会人大学院生を含む学生からの応募作品のなかで、特別賞にふさわしい作品として、筑波大学に提出された学位論文である野瀬義明著『バイアウト・ファンドの機能に関する分析』を決定しました。日本において初めて本格的なデータに基づくM&Aの実証研究であること、とりわけ、日本に特有の公開型のバイアウト企業に関する分析は、欧米の文献にもないユニークな分析であり、高く評価されます。

残念ながら今回の表彰作品からは、もれましたが、優れた作品がほかにも数多く応募されました。なかでも、杉浦慶一編著「バイアウトシリーズ三部作」(『事業再編とバイアウト』『事業再生とバイアウト』『事業承継とバイアウト』)は、114名の執筆陣によるファンドの役割、法律・実務、マネジメント戦略、統計的な整理、経営者に対するインタビューを通じた経験交流など、M&Aのすべてを網羅的、包括的に捉えた大作でした。

受賞された皆様にご心よりお慶び申し上げますとともに、作品をお寄せ頂いた方々に改めて御礼申し上げます。

✿ 選考経過ご報告 ✿

「M&Aフォーラム賞」は本年で第5回を迎えました。毎回質の高い作品が応募され、賞が決まってきたことは大変有難いことと感謝いたしております。

M&Aフォーラム賞の対象は、昨年4月から本年3月までに発表された書籍、論文、または経済専門誌、総合雑誌、各種機関誌に掲載された論文を対象としております。応募される方は、学識経験者、実務家から学生にいたる幅広い方々を対象としております。

今回は、東日本大震災という未曾有の災害を被り、非常に厳しい状況の中でのM&Aフォーラム賞の募集となりましたが、応募作品は昨年より2作品多い14作品のご応募を頂きました。それぞれの作品のレベルは今までの応募作品に勝るとも劣らない、優れたものであります。

ご応募の内訳は、実業界から5作品、学識経験者から4作品、法律関係の事務所から4作品、コンサルタント系の方から1作品となっております。

審査に当たりましては、①作品が独創性に富んでいること、②理論的・実証的な分析を行っていること、③実用性・実務への応用可能性が高いこと、④問題点を先取りし、その解決の糸口を論じているものであること、⑤M&Aの啓蒙に資するものであること、等を主な選考基準としました。

選考は、第1回の選考委員会会議で、選考委員のご専門の作品を中心に担当を決め、それぞれ作品をご審査頂き、受賞候補を8作品に絞りました。この8作品について選考委員全員で評価を行い、第2回の選考委員会にて岩田委員長を中心に討議を行った結果、全員一致で正賞、奨励賞、特別賞を決定いたしました。

受賞された皆様に対しましては、心よりお慶び申し上げますとともに、作品をお寄せいただきました多くの皆様に改めて御礼を申し上げます。

★受賞作品の要約と評価コメント★

◆M&Aフォーラム賞正賞『RECOF賞』

『企業価値向上の事業投資戦略

～成長性とリスクを可視化する定量的アプローチ～

太田 洋子 張替 一彰 小西 健一郎 共著 (ダイヤモンド社)



作品の要約

本書では、コーポレート・ファイナンス（企業財務）とファイナンシャル・エンジニアリング（金融工学）を融合させた新しい理論「コーポレート・ファイナンシャル・エンジニアリング」を提唱し、この理論をベースに開発した定量モデルの紹介と、実務における実践方法において解説している。

「コーポレート・ファイナンシャル・エンジニアリング」は、企業が保有する多様なリスクを定量化し、かつ企業価値向上という観点から、企業リスクを戦略的に管理する理論・技術体系である。野村証券金融工学研究センターでは、この独自理論をベースに多くの定量モデルを開発し、永年、投資銀行業務で実際に活用してきた。本書では、この経験に基づき、事業投資戦略について検討、立案する際に有効な50本の定量モデルを、具体的な活用事例と共に紹介している。

本書は2部構成である。第1部では、まず、現在の日本企業のグローバルでの位置付けと、国際競争力の低下について確認した上で、日本の企業経営実務者にとって、最も関心の高い事業投資マネジメントのフレームワークを解説し、各プロセスに有効な定量モデルの概要を紹介している。さらに、このフレームワークに基づいた経営戦略意思決定の例として、3つのケーススタディを用意し、定量モデルの活用手法を具体的に示した。日立製作所による事業ポートフォリオ評価事例、キリンホールディングスによるグローバルM&Aシミュレーション事例、そして東芝による事業リスクマネジメント評価事例を取り上げている。

第2部では、日本の企業経営実務者にとって、特に関心の高い分野である「資本コスト」事業リスク評価「M&A」について詳細に解説した。まず、資本コストに関しては、グローバルな資本コスト推計に関する理論的説明に加え、定量モデルによる各種パラメータの推計方法も紹介した。さらに、最近最も関心の高い海外投資国の資本コストの設定方法と、その具体的な数値も示した。なおこれらは、企業バリュエーションの第一人者であるトム・コーブランド教授との共同研究の成果である。次に、事業リスクについては、リスクマネジメントの観点からIR活動（リスクIR）について解説し、マクロリスク、セミマクロリスク、プライベートリスクの分析事例について紹介した。グローバル市場での競争力を向上させ、国際競争に勝つためには、長期的な視点に立って、リスクをとった事業投資を行うことが不可欠である。加えて経営者には、保有するリスクの種類や大きさについてしっかり把握した上で、方針を持ってコントロールしていく技術が求められるが、本書では、これらに有効な多くの定量的ソリューションを紹介している。そして、M&Aに関しては、M&A後の企業価値向上創出に大きな影響を与えるプレミアムとシナジーに焦点を当て、それぞれの妥当値を推計する定量モデルを紹介した。M&Aを成功させるためには、①適切な投資基準（資本コスト）の設定に加えて、②プレディールにおいて適当なプレミアムを把握すること、③シナジー創出のための施策と定量目標の設定、④ポストディールプランニングが重要なポイントとなるが、本書では、このうち①②③について具体的に解説している。

評価コメント

野村証券の金融工学研究センターに所属する3名の実務家の方が、企業財務と金融工学とをベースに開発した定量モデルの紹介と、実務における活用方法を提示している実務的な専門書である。

野村証券グループにおいて実際に投資銀行業務で活用されてきた独自の 50 本の定量モデルがベースになっており、実務と理論の双方を踏まえたとしかりとした内容になっている。

また、取り上げている 3 つのケーススタディである、日立（事業ポートフォリオ管理）、麒麟ホールディング（グローバル M&A シミュレーション）、東芝（事業リスクマネジメント）はいずれもいろいろな手法が駆使されているとともに、図や表も多用しながら分かりやすい文章でまとめられ、また実際の計算方法なども詳細に解説されているため、実務家が実際に活用する場合でも非常に参考になる内容になっている。また企業分析の読み物として考えても分析の視点をはじめとして興味深い点が多く、また高度な内容を分かりやすく解説しており、読み応えのあるものに仕上がっている。

さらに使われている手法の中には野村証券の中で生み出されたものも含まれており、それぞれ興味深く、独創性も高い。また全体を通して、読みやすく、プレゼンテーションの面でも高度な仕上がりになっている。

高度な内容を独自のツールも活用しながら、図や表も多用して分かりやすく解説しているという意味では、実務的な専門書、また啓蒙書として非常に高く評価できる。

◆M&A フォーラム賞奨励賞『RECOF 奨励賞』

『M&A の契約実務』

藤原 総一郎 大久保 圭 大久保 涼
宿利 有紀子 笠原 康弘

共著（中央経済社）



作品の要約

本書においては、日本における M&A 関連契約が英米法の概念やアメリカにおける取引実務に大きな影響を受けていることを踏まえ、これらの輸入された概念や実務が日本法のもとでどのように解釈されるのかを分析しつつ、典型的な条項の意味や実務上の留意点の整理を試みるものである。本書においては、「表明保証」、「誓約」、「補償」といった、現代の日本の M&A 取引で締結される典型的な契約の各条項について、その法的性質に立ち返りながら検討している。さらに、初めて M&A 取引に関与する読者が関連する契約の内容と構造を理解する一助になるべく、本書においては、M&A 取引における典型的な契約条項の法的性質の検討を試みるだけでなく、M&A 取引契約の全体像や主要な条項の意図・趣旨、また、主要な条項の相互の関係など、基礎的な部分も広くカバーしている。

本書は、大きく 2 つの部分から構成されている。

前半（第 1 篇）、M&A 取引に関連して締結される契約にはどのようなものがあり、その内容はどのようなものかという概要について、締結されるタイミングや取引類型に応じて検討している。具体的には、①取引交渉段階における契約、②株式の取得に関する契約、③事業の取得に関する契約、及び④組織再編に関する契約の 4 つに分類した上で、秘密保持契約・基本合意書（①）、株式譲渡契約・公開買付応募契約（②）、事業譲渡契約（③）、合併・契約・会社分割契約（④）等々の各種契約について、各取引の特殊性を留意しつつ検討を加えている。

後半（第 2 編）では、第 1 篇で検討した各種の契約のうち、おそらくもっとも基本的かつ重要と思われる閉鎖会社の株式譲渡を題材として、当事者及び構成について解説した上で、取引実行条件・表明保証・誓約・補償・一般条項等々個別の条項の内容と留意点について検討している。検討にあたっては、単に各条項の法的性質を分析するにとどまらず、個別の条項が全体の中で占める役割や、交渉等に関連する実務上の留意点についても可能な範囲で解説するように努めている。

また、全体について、理論的に検討を要する点をはじめとする派生論点については、コラムの形でとりあげている。

評価コメント

本書は、第 1 編「M&A 取引契約の概要」で、M&A 取引の他の企業契約と比べた場合の特徴、取引交渉段階における契約、株式取得契約、事業取得契約、組織再編（合併・株式交換・株式移転・会社分割）契約のポイントが大づかみに示され、第 2 編「M&A 取引契約の具体的内容」で、株式譲渡契約を題材に、契約の交渉・手続き・具体的条項・その効果が、当事者、契約の構成（目次）、合意・価格、義務の履行、取引の条件、表明保証、誓約、補償、解除等につき、かなり具体的に述べられている。

類書には、理論的記述と実務的情報を総花的に拾った、いわば百科全書的な性格を持つもの、また、特定のテーマを取り上げた論文を収録した論文集としての性格の強いものなどがあるが、これらの類書は、ひとことという大手・中規模の法律事務所の弁護士にとって手元に置き、学習し、実践の手引きとなる内容を提供している。

これに対し、本書は、M&A 契約に従事する企業の法務担当者などにとって M&A 契約の全体像をつかみ、実務上の留意点を知り、具体的な契約条項になじむことができるものとなっており、「法曹でない実務家」を念頭において書かれた入門書的な性格を有している。もっとも、駆け出しの弁護士や実務に必ずしも詳しくない研究者にとっても有用であることはもちろんである。文章が読みやすく、また時折置かれているコラムも本文とのバランスが適切で、読者にとって親切な本である。

このような内容が約 300 頁とコンパクトにまとめられていること、全体の構成が明快である（どこに何が書かれているかを掴みやすい）こと、索引も付けられていることから、かなり読者にとって便利なものであるといえる。このような特徴に照らすと、本書に比肩する書籍は、これまでにはほとんど存在しなかったといつてよいのではないだろうか。

◆M&A フォーラム賞選考委員会特別賞『RECOF 特別賞』



『バイアウト・ファンドの機能に関する分析』 野瀬 義明 著 (筑波大学大学院ビジネス科学研究科 博士学位論文)

作品の要約

本研究は、1997年 から今日までバイアウト・ファンドが日本で行った買収を対象とし、買収が被買収企業やその株主等ステークホルダーにどのような影響を与えたか、さらにはなぜ影響が及ぶのかを、買収の前後を通じて検証した実証研究である。本研究の目的は、我が国のバイアウト・ファンドが被買収企業やステークホルダーに対して果たす機能に関して、初めて詳細な実証結果を報告することである。この際、我が国におけるファンドの主要な投資形態である非公開化型と公開維持型の二つのケースを網羅したサンプルを分析する。両者を比較することで、バイアウト・ファンドによる投資が投資対象企業にもたらす効果をより明確化するとともに、可能な限り同一のサンプルを用い、買収前、買収時、買収後という投資サイクルに沿う一貫した分析とすることで、バイアウト・ファンドの機能について多面的な検証結果を得ることを目指している。

本研究は、先行研究のサーベイ論文(第2章)と3つの実証分析から構成される。第3章では、我が国においてバイアウト・ファンドが行った買収案件を対象に、買収が対象企業ならびに対象企業の株主価値にもたらした影響について分析した。第4章では、国内で実施された上場企業の株式非公開化について、対象会社の財務面や株式所有構造面での特徴について分析を行った。第5章では、バイアウト・ファンドが国内で行った公開維持型のバイアウトを分析対象とし、被買収企業の投資後の財務面や株式のパフォーマンスを分析した。

実証分析結果から、日本のバイアウト・ファンドは被買収企業やその株主など被買収企業をとりまくステークホルダーに対して次のような経済的・社会的機能を持つことが示唆された。第一にバイアウト・ファンドは、株式市場で株価がアンダーバリューに放置されている企業に対して買収を行い、買収を通じて被買収企業の株価水準訂正を実現し、株主価値向上を図る機能があるとみられる。

第二にバイアウト・ファンドには不完全ながら被買収企業のバリューアップを支援し実現する機能があるとみられる。バリューアップは「エイジェンシー・コストの削減」と「節税効果の実現」という2つのアプローチで実現されている模様である。第三に、バイアウト・ファンドは銀行等金融機関と比べるとリスクが大きく、バリューアップ期待度やアンダーバリュー度が顕著に高くない条件であっても支援を行い、非公開化やオーナーチェンジといった資本再構築をさせる機能がある。特に、資金調達上困難のある企業に対して(時に巨額の)リスクマネーを供給し経営の安定を支援するラストリゾート的な機能を持つことも示された。

評価コメント

わが国のバイアウト・ファンドに関する詳細な実証研究としては、初めてのものであり、わが国のバイアウト・ファンドの本格的歴史が始まって約10年が経過し、然るべき時に、出るべきものが出たとの感が強い。

この研究は、上場企業を対象とする投資案件について、非公開化型と公開維持型のケースに分類しながらファンドの機能等を分析するほか、ファンド参画案件と不参画案件、非公開化型と親会社/オーナーEXIT型に分類して分析するなど、わが国のバイアウト・ファンドの実態に即した手法・切り口による実証研究となっており、実務的な要請に十分に答えるものと考えられる。

わが国のバイアウト・ファンド歴史は浅く、ファンド自体や個々の案件の動機等も玉石混交であり、また近年では、MBOによる非公開化案件における買収価格の適正性や動機に対する議論が耐えないが、これらを考えるうえでも示唆に富む内容と考える。

とりあえずファンドの歴史が始まって10年余の軌跡の研究であり、今後の研究課題も残ることに加え、今後の実態変化も予想されるが、重要な一里塚の研究ということができよう。

👉M&A フォーラム賞は..

M&Aフォーラムでは、株式会社レコフのご支援を得て、M&Aフォーラム賞を創設いたしました。この賞は、M&Aに関する法律・経済及び社会的な観点からの著書、研究論文の執筆で顕著な提言や研究実績が認められる作品を顕彰する懸賞論文制度です。

M&Aフォーラム賞は、「M&A活動が、わが国経済の持続的発展、あるいは産業・企業の成長・発展に寄与する」という大前提にたち、わが国におけるM&A活動の普及・啓発を図り、併せてM&Aに精通した人材を育成することを目的としています。

M&Aをテーマとした著書や研究論文(M&Aと法律・経済・経営・会計・税務・社会・文化等との関係)で、理論的・実証的・実務的な分析を論じたものが対象です。学識経験者、行政担当者、M&A専門家、企業関係者、大学院・大学・専門学校の学生等、幅広い分野の方々の応募を受け付けます。



📌 受賞の皆様の言葉

『企業価値向上の事業投資戦略 ～成長性とリスクを可視化する定量的アプローチ～』

太田 洋子 (野村證券(株) 金融工学研究センター クオンツ・ソリューション・リサーチ部 部長)
張替 一彰 (野村證券(株) 金融工学研究センター クオンツ・ソリューション・リサーチ部 シニアクオンツアナリスト)
小西 健一郎 (野村證券(株) 金融工学研究センター クオンツ・ソリューション・リサーチ部 シニアクオンツアナリスト)

(筆者連名) この度は第5回M&Aフォーラム賞正賞を頂き、大変光栄に存じます。本書は、私どもが提唱しているコーポレート・ファイナンス(企業財務)とファイナンシャル・エンジニアリング(金融工学)を融合させた新しい理論「コーポレート・ファイナンシャル・エンジニアリング(企業金融工学)」をベースに開発した定量モデルの紹介と、事業投資戦略策定や意思決定におけるモデルの実践方法について解説しています。アプローチの斬新さと、大胆な事例研究をご評価いただき誠に光栄に存じます。日本企業が国際競争に勝つためには、長期的な視点に立ってリスクをとった事業投資あるいはM&Aが不可欠です。経営者には、保有するリスクの種類や大きさについてしっかり把握した上で、方針を持ってコントロールしていく技術が求められます。企業金融工学の理論と実践を通して、日本企業の企業価値向上さらには日本経済の活性化の一助となるべく、今後も尽力して参る所存です。関係者の皆さまに、厚く御礼を申し上げます。

『M&Aの契約実務』

藤原 総一郎 (長島・大野・常松法律事務所 パートナー 弁護士)
大久保 圭 (長島・大野・常松法律事務所 パートナー 弁護士)
大久保 涼 (長島・大野・常松法律事務所 パートナー 弁護士)
宿利 有紀子 (長島・大野・常松法律事務所 アソシエイト 弁護士)
笠原 康弘 (長島・大野・常松法律事務所 アソシエイト 弁護士)

(筆者連名)この度は第5回M&Aフォーラム賞奨励賞という栄えある賞を頂きまして大変光栄に思っております。本書のはしがきにも書かせていただいた通り、本書は、日本法上の議論が十分になされていない論点について、「自分達で一度徹底的に考えてみよう」という方針のもと、執筆者間で議論しつつ作業を進めたものです。判例も学説上の議論も乏しい中で理論的検討を行うのは想像以上に難しく大変な作業でしたが、今回このような賞をいただけたことで、その苦労にも一定の意味があったことを実感でき、大変嬉しく思っております。また、本書の内容は諸先輩弁護士を初めとするM&A実務に携わる多くの先人の長年に渡るプラクティスを土台とするものでありますので、これまでの実務を築いた諸先輩方に大変感謝しています。今後につきましても、実務の深化や時代の変化、さらには債権法改正等の法改正に伴い、さらに検討を深めなければならない論点が多々生じてくるものと思いますが、M&Aに携わる実務家として日々努力し、これらの論点及び関連する実務についてさらに工夫と検討を重ね、日本のM&A実務の発展に多少なりとも貢献していきたいと思っております。

『バイアウト・ファンドの機能に関する分析』

野瀬 義明 (筑波大学大学院ビジネス科学研究科 博士課程修了/
大和企業投資(株) 投資本部 事業投資課 次長)

この度はM&Aフォーラム賞選考委員会特別賞という栄えある賞をいただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。本研究は筑波大学大学院ビジネス科学研究科における博士学位論文です。主指導教官である伊藤彰敏先生(現一橋大学大学院)ならびに熱心なご指導をいただいた諸先生方に深く感謝申し上げます。日本でバイアウト投資が解禁となって10余年。バイアウト・ファンドが投資先や日本の金融市場で果たしうる役割については、まだまだ不明な点が多く、実務者として何か日常の業務に役立つ手がかりを得たいと考えておりました。本研究が実務等で活かされるためにはまだまだ遠い道のりがあると自覚しておりますが、本賞をいただいたことで研究の方向性は間違っていないと確信いたしました。今後も本賞の名に恥じないように研鑽を積み、日本のバイアウトならびにM&Aの発展に貢献したいと考えております。

《M&Aフォーラム賞の受賞作品(受賞者)の歴史》

(敬称略)

《第1回M&Aフォーラム賞(2006年4月～2007年3月 発表書籍・論文)》

- ㊦ M&Aフォーラム賞正賞 『RECOF賞』 1篇
□ 『M&Aと株価』(東洋経済新報社) 井上 光太郎 加藤 英明 共著
- ㊦ M&Aフォーラム賞奨励賞 『RECOF奨励賞』 2篇 (順不同)
□ 『公開買付規制における対象会社株主の保護』(論文) 飯田 秀総 著
□ 『対中投資に関する法的問題
～M&Aによる中国進出の Best Practice 追求～』(論文) 下村 正樹 著
- ㊦ M&Aフォーラム賞選考委員会特別賞 『RECOF特別賞』 1篇
□ 『日本のバイアウトに関する実証分析』(論文) 杉浦 慶一 著

《第2回M&Aフォーラム賞(2007年4月～2008年3月 発表書籍・論文)》

- ㊦ M&Aフォーラム賞正賞 『RECOF賞』 1篇
□ 『日本のM&A 企業統治・組織効率・企業価値へのインパクト』(東洋経済新報社)
宮島 英昭 編著
- ㊦ M&Aフォーラム賞奨励賞 『RECOF奨励賞』 2篇 (順不同)
□ 『委任状勧誘に関する実務上の諸問題
～委任状争奪戦(proxy fight)における文脈を中心に～』(論文) 太田 洋 著
□ 『買収されるのも悪くない。 三角合併解禁の本当の意味』(PHP研究所) 北村 慶 著
- ㊦ M&Aフォーラム賞選考委員会特別賞 『RECOF特別賞』 1篇
□ 『アクティビストファンドと株価効果』(論文) 小野 美和 著

《第3回M&Aフォーラム賞(2008年4月～2009年3月 発表書籍・論文)》

- ㊦ M&Aフォーラム賞正賞 『RECOF賞』 1篇
□ 『M&A国富論 「良い会社買収」とはということか』(プレジデント社)
岩井 克人 佐藤 孝弘 共著
- ㊦ M&Aフォーラム賞奨励賞 『RECOF奨励賞』 1篇
□ 『MBAのためのM&A』(有斐閣) 田村 俊夫 著
- ㊦ M&Aフォーラム賞選考委員会特別賞 『RECOF特別賞』 1篇
□ 『日本における株式非公開化の価値創造効果』(論文) 何 叢暉 著

《第4回M&Aフォーラム賞(2009年4月～2010年3月 発表書籍・論文)》

- ㊦ M&Aフォーラム賞正賞 『RECOF賞』 1篇
□ 『暖簾の会計』(中央経済社) 山内 暁 著
- ㊦ M&Aフォーラム賞奨励賞 『RECOF奨励賞』 2篇 (順不同)
□ 『バイアウト 産業と金融の複合実務』(日本経済新聞出版社)
佐山 展生 山本 礼二郎 共著
□ 『税務・法務を統合したM&A戦略』(中央経済社)
大石 篤史 小島 義博 小山 浩 共著



(参考) 第5回 M&A フォーラム賞 募集要項

M&A フォーラムは、わが国の M&A の普及・啓発、人材や市場の育成を目的とした活動を展開しております。
M&A フォーラムでは、M&A に関する法律・経済・経営・会計・税務・社会・文化等さまざまな観点からの著書、
研究論文の応募をお待ちしております。

応募資格、条件など

- [資格] ・学識経験者、行政担当者、M&A 専門家、企業関係者(実業界)、大学院・大学・各種専門学校を含めた学生等、幅広い分野の方々からの応募を受け付けます。
・個人のほか、学校やゼミナールなどの団体、グループでも応募ができます。
- [テーマ] ・M&A に関わる著書、研究論文(M&A と法律・経済・経営・会計・税務・社会・文化等との関係について論じたもの)で、理論的・実証的・実務的な分析を論じたものとします。
- [条件] ・日本語で書かれたもので、原則として 2010 年 4 月から 2011 年 3 月までに発表された著書、論文で、経済専門誌、総合雑誌、各種機関誌等に掲載された論文も可とします。
・また、大学院、大学、各種専門学校を含めた学生の方々につきましては、修士論文、博士論文、卒業論文も対象に加えます。
・対象となる著書および論文いずれも、執筆者ご自身の応募による作品に限定いたします。
- [応募] ・所定の応募用紙に記入し、応募作品(2部)と作品要旨(1,000 字程度)をご提出ください。
- [期間] ・応募期間は 2011 年 4 月 30 日までとし、当日の消印も有効といたします。
- [発表] ・入選者には 2011 年 8 月末を目途に本人宛に通知するとともに、M&A フォーラムのホームページ (<http://www.maforum.jp>) にて発表を行います。
・入選者の表彰および賞の贈呈は 2011 年 9 月を予定しております。

審査、選考について

- 応募書類、応募書籍・論文は選考委員会で審査を行います。
- 選考委員長は、岩田 一政 氏(日本経済研究センター 理事長)にお願いしております。
- 選考委員会は、M&A に関するさまざまな分野の主導的な研究者や実務者の第一人者で構成されます。

<第5回選考委員会(敬称略)>

- ・選考委員長 岩田 一政(日本経済研究センター 理事長)
- ・選考委員 大杉 謙一(中央大学法科大学院教授)
- 西山 茂(早稲田大学ビジネススクール教授)
- 丹羽 昇一(株式会社レコフデータ 執行役員)

- 応募作品および選考過程に関するお問合せには応じられません。



表彰・賞金

- | | | |
|----------------------------|-----|-------------|
| ◆M&A フォーラム賞正賞 『RECOF 賞』 | 1 篇 | 賞状・副賞 50 万円 |
| ◆M&A フォーラム賞奨励賞 『RECOF 奨励賞』 | 1 篇 | 賞状・副賞 10 万円 |
| ◆M&A フォーラム賞選考委員会特別賞(学生対象) | 1 篇 | 賞状・副賞 10 万円 |

【M&A フォーラム】 <http://www.maforum.jp>

(事務局) 社団法人 日本リサーチ総合研究所

〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-12-11 九段スカイビル 3 階

(電話) 03-5216-7315 (FAX) 03-5216-7316 (Email) info@maforum.jp

